

¡Hola, amigos!

第084号

(RとNの Cádiz からの手紙)

皆さんこんにちは。これはHPというより、私達の近況をお知らせする長い手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は毎週、日本時間の金曜朝03:00時から07:00時の間に実施します。

臨時休刊の場合は、なるべくその前の週にお知らせするつもりです。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のは順次削除します。

では、今週号へどうぞ。 2005年11月04日 カアディスにてR y N

☆今週号のトップヘジャンプ

現在有効なバック・ナンバーは083号(10月21日)、082号(10月14日)

081号(10月07日)の三週分です。各週のトップにあるボタンからどうぞ。



「インテルカンビオ」の巻

皆さんこんにちは。HPは一週間飛びましたが、おかげさまで私達は先週、訪ねてくれた友人夫妻とノンビリと楽しい一週間を過ごしました。「旧友再会」という唄の文

句通りです。♪今日の酒はうまかった♪ ♪訪ねてくれて・・・ありがとう♪

カァディスへのアクセスの不便さは、はるばる日本から訪ねてくださる方にはまことに申し訳ないことだと思つづく思います。それだけが前の住所に較べて格段に劣点ですが、私達にとってカァディスはそれを埋め合わせて余りある長所が多いので仕方がありません。日本からのスペイン直行便再開が切に待たれるところです。

しかし、例えば成田～マドリード直行便が再開されたらホントニいいか？それだけで問題解決か？というとそれが又そうばかりでもないのです。

最近の大使館情報によれば、マドリード市は日本からの観光・投資の誘致に積極的に取り組んでいるのだそうで、その一環として、市内の観光案内標識に日本語の表示が新設されたとのこと。また「日本語ガイドつき徒歩ツアー」というものもスタートしたらしい。

それは大いに結構なことですが、すぐ後で届いた同じく領事部からの「最近一ヶ月の邦人被害例」というメール情報によると、相変わらず日本人観光客の被害は多く、重大な障害事件には至っていないもののかなり危険なケースも見られます。

一番多いスリや置き引きは、あまりに無防備な被害者側の油断が指摘されても仕方がないですが、危険なのは、いきなり後ろから首を絞められて、気を失っている間に持ち物全てを強奪される事例が多発していることです。これなどは一つ間違うと取り返しのつかないことになりかねません。

日本語案内も結構ですが、それよりも有名観光地での犯罪防止強化を強く望みたいですね。市当局の思惑は別として、Rの経験では大体どこの国でも外国人の被害に対して警察は冷淡なことが多い、まあ、言葉の障壁もあることですから一概に警察を責めるわけにもゆきませんが、とにかく警察の世話にならずに済むことが一番です。

マドリードやバルセロナ通過の際はくれぐれも気をつけてください。

その点カアディスは観光地としてはマイナーだし、外国人住民も少ないので犯罪発生率は極めて低いと思います。私達は危険の匂いを感じたことはありません。かといって決して油断はしていないつもりですけどね。

今回の友人夫妻もその前の若いカップルもパリ経由でセビージャに着きました。今のところ、このルートか、ロンドン経由セビージャが一番無難だと思います。最近ようやくヘレス市内からヘレス空港へのバス便が開通したという情報を得ていますので、そのうちでかけて、この空港の利用価値を調べてみようと思います。ロンドン経由ヘレスというルートが可能ならソレが一番安全なのですが・・・。

*

一週間のブランクがあったので、もう先々週のことになりますが、例の蛸捕獲作戦の次の日のことでした。いつもの通り短パン・裸足で浜の散歩をしていました。最近の浜は平日になると散歩する人もめっきり減ってセイセイしています。前から来る人をよけるために蛇行しなくてはならない、ナンテことはなくなりました。公式的には浜は犬の散歩禁止ですから、夏の間、早朝や日没後遠慮しいしいやっていた人達も日中おおっぴらに出てくるようになりました。相変わらず犬禁止の標識は立ててありますが、そんなもの気にする人は誰もいません。

そのとき私達の周りには誰もいませんでした。ななめ前のほうから犬を連れた熟年婦人、オバさんと呼ぶのはチョットはばかりムードの人がやってきました。スペインの熟女には数少ないスリムな人です。

その人は私達を見るとちょっと表情を動かして、それまで放していた犬を呼び寄せ、リードにつなぐと私達のほうへ近寄ってきました。

誰か知り合いの人が私達をはさんだ反対側にいるのかと思って振り返りましたが、誰もいません。そしたら、「あなた達は日本の方ですか？」とききました。

ハイ、そうですが・・・。「あなた英語話しますか？」　ハイ、少しなら。するとホッとしたように英語で話し始めました。お世辞にも上手な英語ではありませんでしたが、私達には、少なくともスペイン語でまくし立てられるより遥かにマシです。私達のスペイン語が自分の英語以上にヤヤこしいだろうと見越して、自身不自由な英語を話してくれたんですね。解りにくい英語だなんて言ったらバチが当たります。ありがたい気配りです。

「私、あなた達のことはずっと前から気付いていたのよ、日本の方だろうなッテ」それから長いこと浜で立ち話、犬もおとなしくジッと座って待っています。彼女、マルタ Marta の話はざっと次の通り。

彼女の一人息子は日産自動車に勤めていて今はトウキョウにいること、彼は奇しくも n と同じようにブリストルに留学していたこと、彼のガール・フレンドはナオコということ、自分の生まれはスペイン最古の大学があるサラマンカの近くであること、現在の住所はコレコレ（私達のところから徒歩4～5分のところ）であること、近年離婚して一人暮らしであること、年齢はRとNの間59歳であること、などなど。初対面の私達にそんなことまで話していいの、とこっちが気になるくらい開放的に、合の手を入れるのが忙しいくらい次々と慣れない英語に苦労しながら話すんです。勿論、私達も今の境遇やブリストルに複数回行った経験があること、n のことなど、同じように包まずに話しました。

その日はそれで別れましたが、良かったらいつでも遊びに来てね、と言ってくれました。多分息子さんから色々聞かされて、日本及び日本人に好印象を持っていたんでしょうね。その日本人と見える私達が浜の散歩をしているのを度々見かけて、いつか話しかけてみよう、といい機会が来るのを待っていたみたいでした。

その日は散歩の人もまばらで、周囲には私達のほかに人影がなかったので、このときとばかりに話しかけてきたものと思われれます。前にも言いましたが、私達はこの町では既にかなりの人に見知られて、憶えられているらしい。何しろどこへ行くにも徒歩で、常に二人連れで町中あちこちに出没してますからねー。でも私達の方は1～2度声を交わしたくらいではなかなかスペインの人の顔を覚えるのは難しい。



(マルタは浜がこの状態になるのを待っていたらしい。人が少ないのはいいサー)どのくらいの人数の人が私達を覚えてくれているのかは知る由もありません。けれども、お互いに名前は知らないながら、道や浜やスーパーの中などですれ違おうと挨拶する人は間違いなく20人以上になります。

マルタはそのレベルを一段超えた友達になったのです。数日後、私達はマルタ宛にスペイン語で手紙を書きました。私達自身のことを改めて紹介すると共に、もし良ければインテルカンビオ intercambio(語学交換)をしませんか?という内容です。

かねて私達は誰か地元のスペインの人で、英語を話す人と語学交換ができれば良いなと思っていました。これまでのスペインの友達では一昨年のガリシアへのバス・ツアーで一緒だった二組の夫婦がいます。そのうちの一組は英語が達者な人で理想的なのですが、住所がコルドバであまりに遠い。

もう一組はカァディスの人ですが、英語は殆どダメ、しかもまだ現役で私達のようなオオ暇人の相手をさせるのはハバかります。だから両方ともたまに短いメールの交換をするにとどまっていた。

一時は近所の語学塾のロビーに、語学交換希望のビラを貼らしてもらおうか、とも考

えました。語学塾は英・独・仏・伊などが対象で、日本語は競合しないから塾には迷惑ではないはずだし、そういう塾へ来る人は日本語にも関心を持ってくれるかも知れない。けれども、未知の不特定多数の人に呼びかけるのはイヤで、実行には踏み切れないでいました。

マルタは一人暮らしで、暇も十分にありそうだし、彼女も将来日本へ旅行する可能性は十分あるし、そのときは息子のガール・フレンドに会うかもしれない。だから、日本語を習うことには興味を持ってくれるに違いない、と思ったのです。

この手紙を15日土曜日に彼女のピソ(=マンション)のポルテロ(=玄関番)に預けました。返事は手紙かメールでくださいと書いておきました。

月曜日、昼の支度をしているとノックの音。(入り口のチャイムは故障中なんです) ドアを開けるとマルタが立っていました。ポルテロがあなた達の手紙を今朝になって渡してくれたの、だから返事が遅くなって、と申し訳なさそうに言うんです。すぐに入ってもらって、暫くお話をしました。

語学交換は彼女も全く同感で、自分には時間も十分あって問題は何もない、スペイン語を教えることは多少経験もあるので喜んでやらしてもらおう。但し自分が日本語を勉強できるとは到底思えない、息子に聞いている話では日本語はとても難しいらしいから……。でも、息子さんのアミーガと直接話ができたら楽しいでしょう？ そりゃそうだわねー、だけど、私にできるかしら……。大丈夫、たとえ一言だっていいじゃないですか？ ソウねー、じゃ、やってみようかしら……。

今週、私達には来客があるので、じゃあ11月から始めるということはどうですか？ いいわ、私のほうは全くフリーだからいつでも電話ちょうだい、場所は私の所へ来てもらってもいいし、私が来てでもいいし、とうれしそうに帰って行きました。

さて、これで私達もスペイン語については勿論、スペインの人の生活感をナマで色々聞くことができるし、日ごろ不審に思っている町のあちこち転がっている小さな疑問について聞くこともできる、ニュース解説もしてもらえるかも知れない。

11月からは、HPに加えてスペイン語の予習もしなきゃなんないし、こりゃ楽しくも忙しいことになるなあ。ガッコ行ってたときでさえ予習なんてしたことなかったのに。それに予習したってすぐ忘れるだろうから直前でないとダメだしネー。***

「ガンバス・アル・ピルピル」の巻

これは大抵のスペイン料理の本に出ていると思いますが、日本人に勝るとも劣らない

エビ好きのスペイン人お気に入りの一品。 gambas al pilpil と書きます。

私達は白いテーブルクロスが掛かった、カマレロ camarero(ウェーター)に監視されながら食べるようなレストランは出入りしたことないので、そういうところでもこのメニューがあるかどうか知りません。まあ、こういうシンプルで安くてウマイモノなん

かない筈。手がこんでて高けりゃ旨いのは当たり前なのにソレすらも怪しい。

このメニューはやはり安手のレストラン、または露天で潮風に吹かれながら呑み喰いするようなところがお似合いでしょう。そういうところでは初めはテーブルには何も敷いてなくて、注文が呑みものだけならそのまま、何か食べるものを注文すると初めて

テーブルクロスを持ってくるという具合、ソレも紙の使い捨てのものが多い。

前記のようなちゃんとしたレストランでは、一人最低2皿注文しなくちゃいけない。

これがマズ私達にはとても食べきれぬ量ではありません。スペインでは皿にあるものを全部食べてしまわないのがマナーなんだ、と聞いていますが、馬鹿な話じゃありませんか。戦後の食糧難の時代に育ち盛りで、毎日イモばかり食わされた世代として

はそんなバチ当たりなマネは到底出来ません。

本式のレストランではなくて、店内のカウンターにかじりつくスタイルと、店の前のテラス席、店の奥の間仕切りの向こうにテーブルクロスが掛かった席が同居する所では、それぞれの場所によって料金が違います。同じものを食べて値段が違うと言うのも受け入れがたい。まあ、立って食べるのもナンだからテラスのテーブルぐらいで我

慢するのが私達の普通のスタイル。

ソレよりは、いっそオープン・エアでテーブルにパラソルを立てているような店が

気持ちがいい。全テーブル均一料金。これが一番のお気に入り。

さて、本題に戻りましょう。ガンバ gamba とは日本で言えば芝エビ、剥き身にして

長さ5センチ前後までのもの。ガンバスはその複数形です。



これがそのガンバス・アル・ピルピル。これで二人分。写真写りがいいようにと色にこだわった結果火を入れすぎてチョット硬くなりました。ここまで迄硬くしない方がいいでしょう。何事も、過ぎたるは・・・ですが料理は特にそうみたいです。

これは失敗例ですが、負け惜しみを言うと、硬くなりすぎた分ビーノのアテとしては上々。シコシコと噛みしめてユックリ食べてユックリ呑むのにもってこいです。

ガンバスは前記の通り芝エビです。アル al は、料理名には良く使われる〇〇風という言い方。だからアル・ピルピルはピルピル風、またはピルピル仕立て、とでも言いましょうか。江戸前〇〇とか浪速〇〇というアレです。

女性形ならア・ラ a la 〇〇となります。例えばア・ラ・プランチャ a la plancha と言えば鉄板焼き、ア・ラ・ハポネサ a la japonesa と言えば日本風ということ。

ここで解らないのはピルピル。アルッたけのスペイン語辞書を片っ端から調べても出ていません。

これまでに読んだ日本語の本で二人の著者がこれについて書いてますが、一方はこの料理を作っている時に出る音だと言うし、他方はバスコ語だと言うのです。

擬音だと言う説はどうも納得しかねます、ピルピルなんてどういう音だろう。実際作

ってみるとわかりますが、出る音はピチピチ、プチプチという感じです。

もつとも、英語ではイヌの吠えるワンワンをバウウアウ bowwow などというらしいからピチピチをピルピルと聞く耳もアリかもしれない。擬音語も感じ方も言語系によつ

て随分違いますね。日本語にはこういう反復による擬音・擬態語が実に多い。

バスコ語説についてはバスコ語の辞書がないので確かめようがありません。しかし、ある限りのスペイン語辞書に出ていないと言うことは標準語以外の可能性は大です。語学交換が順調に始まったら、その内マルタに聞いてみようと思いますが、多分彼女

も語源は知らないんじゃないか？

意味や語源はともかく、アル・ピルピルをピルピル仕立てと解釈すれば、素材名の後ろにアル・ピルピルが付いた料理は色々ある筈です。私達の知る範囲では、ガンバスのほかにバカラオ・アル・ピルピルというのがある、むしろそちらのほうがポピュラーな料理かも知れません。前記二人の著者の言葉もこれについて言ったことです。

しかし、バカラオ・アル・ピルピルとガンバス・アル・ピルピルは素材の違いだけでなく料理として全く異質のようです。バカラオ bacalao とは鱈のことですが私達はまだソッチの本物は試したことがありません。この料理は北のバスコ地方の郷土料理的なものらしく、作り方の流儀も色々あって、細かく言えばキリがないものらしい。

なお、バスコのことを日本ではバスクと呼ぶのが一般的ですがソレはフランス語なの

だそうで、スペインでは Pais Vasco とするのが普通です。

私達がガンバス・アル・ピルピルを外で食べたのは三軒、共通点は海産物のくせに白

よりは赤に合うという点。理由は油ッケと唐辛子の辛味でしょう。

パエリヤ鍋を小さくしたような直径17～8センチの鉄鍋で供されることが多いですが、大抵は熱いオリーブ油の中にムキエビが泳いでいるという状態で出てきます。

困ったことに、その油もエビの味とニンニクの風味と唐辛子の辛味が染み出して美味しい。ちぎったパンにつけて食べると、またビーノがすすむことになります。

しかし、これではなんぼオリーブ油が健康的だといっても過剰摂取になりかねない。

そこで、これも我が家風アレンジしました。

作り方は、外で食べた経験から勝手にこんなモンだろうと考えたもので、料理の本にどう書いてあるかは知りません。以下、日本でも何のことはなく簡単に出来る R y N

風ガンバス・アル・ピルピルです。

まず、ムキエビのセワタを取り除き塩水で洗います。ウチでは塩分はこれだけ。一人前100g。こんなもの腹いっぱい食べるものではないですから、まあ、こんな程度でいいでしょう。あくまで、つまみ、ビーノまたはセルベサのアテですからね。そんなじゃハクソだ、という品の悪い方はどうぞ200gでも300gでも・・・。

フライパンにオリーブ油を熱します。ソウですねー、二人前200gに対して大匙一杯ぐらいで十分。これでムキエビを炒めてエビの水気を出してしまいます。同時にエビ臭さも抜けます。大方の水分と臭みが取れるまで炒めたらエビをキッチン・ペーパーに取って油をきり、フライパンに残った水と油は捨てます。

フライパンをペーパーで拭き取り、新たにオリーブ油をたっぷり入れます。今度の油量はお好みしだいなんですが、はっきり言って余り少くないほうが美味しい。ウチでは20センチのフライパンに5ミリ位までにしています。店のは1センチ以上。

オリーブ油を入れたら(熱くならないうちに)すぐ、大粒のニンニク一欠けの千切りと鷹の爪2〜3本をいれます。ニンニクは小口切りでもいいですが、芽を取り除くためにまず縦割りするので、ついでに千切りにしています。店で食べるものにはニンニク片を丸のままつぶしたモノが3〜4個入ってます。ニンニクと唐辛子の量・塩加減はお好みしだい。そこは試行錯誤でワタクシ流の味に仕上げてください。

油が十分熱くなったところでニンニクや鷹の爪が焦げないうちにエビを入れます。エビにニンニクと唐辛子がしみこみ、エビが色よくなるまで待ちます。あまり長すぎるとエビが固くなります。エビのサイズによりますが、まあ3〜5分。

タパス皿に油ごと盛ってガンバス・アル・ピルピルの出来上がり。

さて、これで何をやっつけるか？ まず、お勧めは赤。唐辛子がピリッと利いているほど赤が旨くなります。安い箱パックのワインでも化けます。白はこの際クエスチョンとしておきます。同様に清酒は爛でもヒヤでも止めたほうがいいんじゃないでしょうか。焼酎は多分マルでしょう。これと共にやった経験はありませんが「勘」ではOKです。最後にセルベサ。これは赤と共に二重マル。間違いなくベスト・マッチ。

おっと、何をどう呑もうが大きなお世話でしたね。マア、お好きなように。***

「秋色深し」の巻



これはおなじみの我が家のベランダからの浜の風景ですが、今までと少し違う点があります。そう、あちこちに敷いてあったボードウォークがなくなったのです。

日本の暦では秋は9・10・11月ですね。では、スペインの秋・オトーニョ otoñoはどうかというと、少なくともこのカアディスに関する限り9月は断じて夏です。

しかし、同じスペインでも内陸、特に北の地方の季節感は全く違うのでしょうか。上の写真は10月下旬になってからのもので、浜の全ての夏支度、即ちボードウォーク、レスキュー・ボート、浜の夜間照明、救護所、案内所、チリングイトなどなど全て9月一杯はそのまま、秋の気配など微塵もないという有様です。

10月に入ると、マズ仮設案内所が閉鎖になりました。同時にあの短パン・スニーカーのお気楽お巡りさんの海浜詰め所も閉鎖。

真昼のように明るかった浜の夜間照明も10月1日からは点灯されなくなりました。



そのほかは例えばボードウォークやチリングート、レスキュー・ボート用のブイの撤去作業などはユックリゆっくり少しずつやっていたましたが、それも10月一杯でようやくカタがついたという感じです。

10月も半ばになると天気はガラッと変わり晴れたり曇ったりパラついたり、夏の間の快晴続きがウソのような空模様になりました。そういう天候の変化による季節感とは別に日本にはない大きな季節の区切りがあります。夏時間の終わりです。

スペインだけでなくEU諸国は全て同じ筈ですが、10月最後の土曜日で夏時間は終わり、30日日曜の03:00時を02:00時に戻したのです。これで日本との時間差は8時間となりました。9月半ばから夏が終わると言い続けてきましたが実際にはナカナカ終わらず、夏時間の終りでようやく一連の手続き終了と言う感じです。

各空港の発着時間表もこれを機にベラーノ verano 夏のスケジュールからインビエルノ invierno 冬のそれに変わりました。不確かな空模様の変化による季節感よりは夏時間をやめたことのほうにはっきりと夏の終わりを感じられます。カアディスではたまたまソレが気温や天候の変化とほぼぴったり合っているように思います。



ボードウォークも、棕櫚の日除けも、ゴミ箱も、シャワーも、足洗い場も、綺麗さっぱり取っ払われて、浜はセイセイすると同時に少し不便になりました。

散歩に出ても、波打ち際の固く締まった砂地に出るまで今まではボードウォークを歩いていけば簡単でしたが、今は柔らかく足が埋まる砂浜を約百メートル歩かなければなりません。浜から上がる時も、今までは足洗い場で足の塩気とビーチ・サンダルを洗ってから帰って来れたのに、塩まみれ砂まみれのまま帰らなくてはなりません。

雑巾持って出なきゃならんなーと言っていました。

ところが訪ねて来てくれた友人が言うには、彼のホテルの前の浜にはシャワーも足洗い場もアルと言うんです。私達はそこは普段使ったことがないところで、全部のシャワーが既に取り払われていると思込んでいたのです。これは助かりました。散歩の

距離を百数十メートル延ばせばいいだけですからね。

その後、もう一箇所シャワーと足洗い場を残してあるところを見つけました。サーファーズ・ショップの前の浜です。さてはホテルとショップが清掃班に一ひねりカマしたのかな？ ホテルの泊り客もサーファーも一年中時なしですからね。



上は9月一杯までの明るく照明がともった浜、下は現在。時間帯は全く同じ花金のミッド・ナイト。場所も同じウチの真下。去年、私達がここへ引っ越したときは下の写真のような状態でしたから、今までのベナルマデナの部屋と較べると格段の静かさ。こりゃ一寂しいとこ過ぎたかなとチョット気がかりでしたが、ソレは全くの杞憂というものでした。出来れば一年中このままであってくれればいいのに。



秋の深まりと共に一日の間の体感温度にかなりの差を感じるようになりました。夏の間も、日向と日陰、よく言われるスペインの光と影、の差ははっきり感じました。けれども最近は、一日に三つの季節を感じるというもいいようです。朝は春、日中は夏、日没と同時に秋、という具合。

このギャンブル・バーさんたちも午後の暖かい日差しを浴びて砂浜で賭け事にふけていたのにいつの間にか日も傾いて寒くなったかビーチ・タオルをかぶっています。もともと、このバーさまが寒くなったのは負けがコンだためかも知れませんがね。始めは頭が熱くならんように小さいパラソルで日陰を作っていた位なのに・・・。

ところで、10月30日の夜、テレビは皇太子夫妻の初めての赤ちゃんの誕生を報じるニュースで持ちきりでした。結局誕生は次の日31日の午前1時半頃だったのですが、折からの雨の中、大勢の市民や報道陣が病院前に詰め掛けている映像が何回も流れていました。生まれたのはニーニャ、お姫様でしたが、これを機に女帝は認められるか否かの憲法解釈がかまびすしく論じられているようです。同性結婚すら認知される国で、しかも歴史上有名な女王もいるのに、何を今更という気がしますけどね。



これは潮の引き始め。引き残りの海水がまだ砂地に吸い込まれず薄く残って水鏡になっています。夏の間は大勢の人に踏み荒らされて形が変わっていた浜も、人が少なくなるにつれて見る見るマッ平らになってきました。自然の自浄力は素晴らしい。

これから来年5月まで、浜は地元の人だけの憩いの場所となり、土日のスポーツ好きが集まる時以外は静かな散歩道になるでしょう。いつまでもこの浜の散歩を続けたいと思っています。自分達の健康とスペインの物価上昇だけが大きなクエスチョン。

ソウソウ、そういえば大家のデビ夫人風から手紙が来て、結局家賃は値上げされてしまいました。値上げといってもIPC(消費者物価指数)上昇分3.7%だけで、これは契約書にも謳われている大家の権利ですから止むを得ません。むしろ、IPC上昇分キッチリということは、実質的な家賃値上げはしないワヨ、という意思表示とも受け取れます。ヌカ喜びさせないで、契約自動更新の期日前に言って欲しかった。

不動産屋の店頭のビラを見ると、この辺りの部屋は益々高くなりつつあります。私達が家を処分したのはバブル崩壊後の低迷期で散々でしたが、この国も早くそうなる事を祈るのみ。デビ夫人ことセニョーラ・コンチャには悪いけど・・・***
